
正しいお鍋の使い方

汐森遠也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しいお鍋の使い方

【Nコード】

N4267W

【作者名】

汐森遠也

【あらすじ】

飛ばされた先の異世界で、「勝手気ままな創作料理」に目覚めた娘は、小さな町のすみっこで、小さな食堂を営んでいた。

彼女はある日、店を訪れたひげもじやの熊（正体：人間）から、某お屋敷への出前を頼まれる。

悪名高いそのお屋敷へ出向いた彼女を待っていたのは、放っておけば調理用の鍋でもあやしげな薬を精製しようとする巨大蛙（正体：

人間)だった。

「おれさ、あんまし太ると食べられちゃうと思うんだよね」

「だれが食べるのきみたいなゲテモノ。ってか、鍋で毒薬を精製するなって言ってるでしょうが！」

「いえ、事実あの方は、狙われているのです」

見た目と声がはなはだしく不釣り合いな蛙に振りまわされる娘。

やがてその周辺に、無駄に艶やかな謎の童女が出没しはじめる。

0・アメイロタマネギ

レモンによく似た果実から絞った果汁に、白百合もどきの蜜を加えて、小さなお鍋でことごと煮こむ。

リユス麦を粉にしたものを塩水で練ってうすく伸ばした生地に、バティのお乳から作った桜色のチーズを塗って、玉葱と緑色唐辛子と、黒こしょうをまんべんなく散らす。

それを窯の中に入れて、あとはときどき様子を見ながら、焼きあがるのを待つだけ。

さて。

なにを隠そう、ここは食堂だ。……いや、べつに隠してはいないけど。堂々と表に看板を出してるけど。

ともあれ、この小さな食堂、アメイロタマネギ はわたしが、勝手気ままに創作料理をふるまう場所である。別名、わたしの城。

そして、わたしの名前は麻倉律也^{あさくら りつや}。

こことは違う場所 陳腐な表現でぶっちゃけるなら「異世界」で生まれ育った、かつての女子中学生である。

わたしは少なくとも三つの点で、幸運だったのだと思う。

一つめは、右も左もわからないこの世界に落ちてきてすぐ、多少

性格に問題はあるものの他人に甘いお爺さまに拾われたこと。

二つめは、そのお爺さまが、やたら教え上手な元・教師であったこと。

そして三つめは、こちらの世界に、食材が豊富にあったことだ。

わたしがこちらの世界に来たのは十二歳、中学入学後すぐのとき。そこから三年は、こちらの生活に慣れることとこちらの言葉を覚えることで必死だった。予想もしなかった中学三年間になったわけだ。

今のわたしの人格形成に多大なる影響を及ぼしたその三年間は……まあ正直二度と経験したくないようできて貴重な体験ばかりだったわけだが、ぐだぐだ語っておもしろい話でもないので割愛する。

ともかく、そのやたら密度の濃い三年が過ぎてようやく一息ついたとき、わたしははたとあることに気づいた。

つまり、おいしくない、と。

こちらの生活になじみかけたわたしが衝撃を受けたのは、料理のバリエーションの少なさだった。

食材はいろいろな種類があるのに、加工の仕方がなんともワンパターンなのである。たいてい生のままか、焼くかの二択だけ。

素材の味を楽しむという意味ではありなのかもしれないが、こちらの食べ物に不慣れなわたしには無理だった。だってね、味はともかく、ざらざらしたりごわごわしたりちくちくしたり、未加工では舌触り的によろしくない食材が多いんだよこっちは。

ただ、舌触りの悪さにさえ目をつむれば、こちらにはわたしが元いた日本という国に存在していたものとそっくり同じ、またはよく似た、あるいはどこことなく面影を感じさせる食材もたくさんあった。そこでわたしはどうかして、自分になじみのある、自分がおい

しく食べられる料理を作りだそうと決めたわけである。それまで電子レンジとやかんくらいとしか仲良くしていなかったわたしが、鍋やら窯やら薪やらと全身全霊のおつきあいを始めたわけだ。

結論から言うと、ものすごく大変だった。

一口の味見で失神したところを介抱してくれ、鍋ごと丸焼きにしたところに瓶ごと水をぶっかけてくれ、どうにかこうにかできあがった料理ならぬ生成物を黙々と試食してくれる爺さまの存在がなかったら、とうの昔に投げだしていただろう。

まあしかし、そんな苦闘の日々が続いた三年め、わたしが作り出した実に何万個めかの生成物を口にした爺さまがぼつりと言ったのだ。

「これなら、食べたいという物好きもいるかもしれんの」、と。

基本的に、わたしは褒められれば舞いあがりその気になる性格である。それは、ある日突然異世界かつこ笑いかつこ閉じなんぞに飛ばされ、いろいろ、本当にいろいろあった今でも変わっていない。

そこから、爺さまが昔塾として使っていた小屋を食堂に改装して、今にいたる。

がらこん、と。

扉につけてある鐘が鳴った。

奥で調理をしていても来客に気づけるように、と取りつけたこの鐘、お客にはおおむね受けが悪い。なんだか開けてはならない扉を開けてしまった心持がするそうだ。はるばる町ふたつ越えた向この山まで行って発掘してきたのに、なんとも心外な言われようである。

それはともかく、リュス麦と桜色チーズのピザもどきが焼きあがった瞬間やってくるとは、間のいいお客だ。そう思いながら、わたしは窯の扉を開けた。

とたん、焼けた生地の香ばしい匂い、ぐつぐつと泡立つチーズの幸せな匂いが小さな食堂中に漂う。

「いらつしゃい。ちょうど、『桜色チーズに真珠玉葱と緑色唐辛子のピザ』が焼きあがったところだよ」

開かれた扉のほうを見もせずと言って、わたしは慎重に窯からピザを取りだす。

桜色のチーズにはこんがり茶色の焼き目がついて、緑色唐辛子は焦げることなく、スライスした玉葱はチーズからとろける油にコーティングされて、真珠のように照っている。

ああおいしそう、上出来上出来、と自画自賛していたわたしは、ただど次の瞬間顔をしかめた。

この幸せなチーズの匂いを圧倒して、食堂にははなはだよろしくない臭いが、開いた扉のほうから迫ってきていた。汗と泥をぐつぐつ煮こんだような、この臭いは。

「リツヤ殿！」

響く、がらごん、なんてドアベルの音がかわいらしく思える、破鐘のような声。

ピザをすべらかな木皿に移して窯の扉を閉め、わたしは立ちあがった。

1・ひげもじゃ熊の嘆願

「戸口でわめくんじやないよナキ。きみは借金取りかなにかかい」

あと食堂へは汗を流してからおいでと言ったら、とつけくわえれば、戸口に仁王立ちした髭面の大男　そのくせ黒目がちの瞳だけはやたらうるうるうつぶらである　は、しゅんと、見ているほうが窮屈なくらい肩を縮めた。

「も、申しわけない」

……小山のような巨体で強面なのに小動物を連想させられるって、この男くらいじゃないだろうか。

わたしは息を吐いた。

「……まあ、いいけどね。入ってくれば？　今ならほかにお客もいないから、食堂にあるまじき汗くささ泥くささも大目に見てあげる」

むさ苦しい男ではあるが、嫌いではない。基本わたしは、わたしの勝手気ままな創作料理をおいしいと受けいれてくれた生き物は好きなのだ。この髭面男もそのひとりだった。

だけれどそんなわたしの申し出に、髭面男　ナキははつとしたように顔を上げ、ぶんぶかと首を振った。汗らしきしずくが、もじやもじやの髪からまわりに散る。

「きみねえ」

「お申し出はありがたいが、今回自分はそれより大切なお願いがあつて来たのですリツヤ殿！」

「はあ？」

「我が屋敷のご主人のため、出前をしていただきたい！」

「……は？」

それから約半時間かけて、ナキが訴えたところによると。

ナキが門番として仕えている屋敷のご主人さまは、前々から趣味に没頭するあまり、食事をおろそかにする傾向があつたらしい。

おろそかもおろそか、一日三食きちんと出されているにもかかわらず、あやうく餓死しかけたこともあつたとか。ナキは、主は好奇心を刺激されたこと以外にはとことん無関心・無頓着な方ですから、とフォローしていたが、わたしに言わせればたんなる自業自得である。

そのご主人さまが、最近また趣味に熱中しすぎて餓死寸前の状態になっているらしい。屋敷の者が躍起になって食べさせようとしても、一口受けつけばいいほうだとか。

子どもか、というのが、わたしの正直な感想だったのだが。

「そこで自分は思ったのです、リツヤ殿の料理ならば、主も興味を示されて、食べてくださるのではないかと！　なにしろリツヤ殿の料理は、このあたりでは見かけない、めずらしく美味なものばかりですから！」

「……ありがとう」

拳を握り熱弁してくれるナキに、とりあえず礼を言う。

「そう、屋敷の使用人頭殿にも申しあげたところ、ぜひリツヤ殿に料理を持ってきたりしてくださるようにとのことでした。どうか、リツヤ殿！」

ずずいと、ナキが一気に距離を詰めてくる。暑い暑い。

「むろんお代は割り増しでお支払いすると、使用人頭殿が言うておられました。屋敷までは自分が責任もって、送り迎えをさせていただきます。どうか、お願いいたします！　自分が感動したリツヤ殿の料理を、主にも食べていただきたいのです！」

ナキの褒め言葉はいつだって大げさだけれど、嬉しい。ふだんのわたしならもうこの時点で、ほいほいと出前を引き受けていただろう。

だけど、

「……それって、わたしもお屋敷に行かないとだめ？　ここで料理を作って、料理だけをきみに、お屋敷まで運んでもらうんじゃないの？」

今回、わたしは渋った。

「いえ、その……」

ナキの勢いが、目に見えて落ちた。

「……使用人頭殿が、作った者の顔の見えない料理を主に出すわけにはいかないと」

わたしは溜息をついた。

その溜息をどう解釈したのか　まあなんとなく予想はつくが、ナキが両手を振りまわす。

「ち、違うのです！　自分はリツヤ殿を信頼しています！　使用人頭殿も、リツヤ殿を疑っておられるわけではありません、しかし、」

「わかってるよ、主なんていわれてる人の口に入るものに、その部下が気を尖らすのは道理だ」

だから、調理した者も連れてこい、と。使用人頭とやらの言い分は理解できる。

理解はできるけれど、気が向かない。

だって、ナキが仕えるお屋敷については、よろしくない噂がたくさん飛びかっているのだ。

この町の、隣の隣の都はずれにあるという、ナキが仕えるお屋敷。

その屋敷の中には毒蛇がうようよしているとか、食用の巨大蛙が這いまわっているとか、死人が歩きまわっているとか、人骨が散らばっているとか。屋敷の窓という窓は黒い布で閉ざされていて、なにか公にはできないことをしているのだろうとか、ときおり屋敷の中から爆発音や金切り声が聞こえるとか、幼い女の子が屋敷の中に引きずりこまれていったとか、エトセトラ、エトセトラ。

噂というものはおもしろおかしく伝わるものではあるけれど、それにしたって、そんな話のあるお屋敷に、進んで行きたいとは思えない。

だからわたしは躊躇した、のだけれど。

「お願いいたします！ リツヤ殿の料理はめずらしくそして絶品、必ずや主もお気に召すはずです！」

……そんなつばらな瞳で見つめないでくれよ、ナキ。

2・荷車出前道中

からからからから。

わたしは今、ナキの牽く荷車に乗っている。

膝に大きなバスケットを抱えて。

水玉模様の布をかぶせたバスケットからは、空腹を誘ういい匂いが。

と、ここまでいえばわかりただけだろうか。

わたしは、いわゆるつぶらな瞳というやつに弱いのだ。

ナキはわたしをお屋敷まで運ぶために、荷車を持ってきていた。よくリユス麦の大袋などを運搬するために使われるやつだ。……わたしは荷物か。

ひとつ息を吐き、わたしはバスケットを抱きしめたまま、からからと流れていく町並みを見る。

もうすっかりなじんだ、わたしの町だ。いくつもの煉瓦で舗装された通り、キヤラメル色やミルクティ色の、背の低い家々。ビスケットみたいな扉に、チョコレート色のドアノブがついている。

よく食堂に来てくれるお客とすれ違う。一応手を振っておいたら、不思議そうにしながらも振り返してくれた。

町を出ればほどなく、深緑色の森が広がる。この森を抜けた先が隣町だ。

不思議植物の宝庫であるこの森は、そのぶん動物も多い。中には人を襲うものもいて、わたしがこちらに来て真っ先に爺さまに教えられたのは、ひとりでは決してこの森に近づかないようにということだった。

そんな森へ今、わたしの乗る荷車を牽いて、毛むくじやらの熊みたいなナキがのっしのっしと分け入っていく。

木立を縫うように進んで、振り返っても森の入り口が見えなくなった頃、ナキがぴたりと歩みを止めた。

「リツヤ殿」

低い呼びかけを受けて、わたしは荷車から降りる。

ナキの足音と、荷車の車輪の音が止み、静かになった森の中。耳を澄ませば、わたしたちを取りかこむように、いくつもの息づかいが聞こえた。

「囲まれたね」

「申しわけありません」

「ううん。こんなからこ音立てながら進んでちゃしかたないよ。これの匂いもしてるだろうしね」

これ、とバスケットを掲げて見せて、わたしはそつと視線をめぐらす。

生い茂った枝葉が日を遮る、森の中は緑めいて薄暗い。

その、いつそう暗い木立の向こうに、息づかいの主たちはいる。

狼に似た茶色いやつか、虎に一角が生えたような黒いやつか。

木立の向こうの闇に潜む、その姿はまだ見えない。

が、まずまちがはなく、肉を食う大型の獣だろう。その証拠に、さっきまでそこにあった、小動物の気配が消えている。

いつしか空気は、弓弦のように張りつめていた。

やれやれ。

わたしがバスケットの中に手を差し入れたのと、

「ご心配は無用です、リツヤ殿！」

ナキが、この緊張しきつた空気完全無視の大声を上げたのが同時だった。

3・ファーストコンタクト（前）

「到着いたしましたリツヤ殿！」

「……お疲れさま」

振り向いたナキの口に緑色唐辛子の肉詰めを突っこんでやりながら、わたしは荷車から降りた。

ちなみにこの料理、わたしが今暮らしている町ではわたしの創作料理として知られているが、元ネタはもちろん、わたしが日本でよく食べていたピーマンの肉詰めである。こちらの緑色唐辛子が、ほとんどこぶし大のピーマンといってさしつかえないほどピーマンそっくりの見ためをしていたことからひらめいた。

作り方は簡単。緑色唐辛子を半分に切って、中の種をきれいに取りだしたのち、ロウロという真珠のような花から採れる油を薄く全体に塗る。そこへ、バティの挽肉に赤い香味野菜のみじん切りと黒胡椒もどきを加えよく練ったものを詰めこんで、むらなく焼く。

焼き上がりは、緑色唐辛子を旨味ごと包みこんだロウロの油が真珠のごとく輝き、香味野菜と黒胡椒が香り、透明な肉汁がじゅわりと染みだし　まあ、それは今はどうでもいい。

「美味です、リツヤ殿！」

「そう、それはよかった」

緑色唐辛子の肉詰めは冷めてもそれなりにおいしいからお弁当にも向いてるんだよ。まあ、それも今はどうでもいい。

目の前に広がる景色を見て、わたしは溜息をついた。

到着してしまった。ここからが正念場だというのに。

乗り物酔いと精神疲労で、コンディションは最悪だ。

あのあと　森で肉食獣に囲まれたあとの、ナキの活躍、もとい暴走はすごかった。

手近な大木を引っこぬいて振りまわし、向かってくる肉食獣を文字通り吹っ飛ばしながら森を鷲進、その勢いのまま隣町もあつという間に通過してこの都に突入し、大通りの華やかな人々を跳ね飛ばしながら都のはずれまで突きすすんで、止まった。

本人は、人食い獣からリツヤ殿をお守りせねばと夢中でしたてへ、とかいっていたが。そのリツヤ殿は、時速二百キロは出ていそうな荷車から放りだされないようにと命がけでしがみついていた。

帰ったら爺さまに、この世界の人間の身体能力について確認しよう。個人差こそあれ、わたしが元いた世界とそう変わらないと思っていたのだけれど、もしかしたら認識違いだったのかもしれない。少なくとも元の世界ではわたしに、片手で大木を引っこぬいたり、新幹線とほぼ同じ速度で走ったりする知りあいはいなかった。

「で」

気持ちを切りかえるべく頭を振って、わたしはあらためて目の前に広がる景色を　灰色の絶壁に背を守られたたずむ、焦茶色のお屋敷を見つめた。

平屋建てで、高さはない。そのかわり幅は、わたしの小さな食堂が軽く八件は入りそうなほど広がった。老木から造られたような焦茶色の外観は、なんとなく、廃校になった古い木造校舎を思わせる。

そんなお屋敷の窓という窓は、噂通り、内側から黒い布で塞がれていた。中にだれがいて、なにをしているのか、いつさい窺い知ることとはできない。そもそもここは都のはずれもはずれ、近くに民家はひとつだつてないのだから、わざわざ窓を塞ぐまでもなく、屋敷の中を人に覗かれることはそうそうないはずだが。

お屋敷の左手には枝垂れ柳の木がある。日本にもあつた枝垂れ柳とまったく同じものかどうかはわからないが、よく似ていた。湿気を含んだ風にゆらゆらと揺れている。

お屋敷より背の高い、その枝垂れ柳の木の下には、どう見ても墓石だらうものが置かれている。卒塔婆もどきの木片もお屋敷を囲うように、六本ほど地面に突き刺さっていた。

なにか出る雰囲気満載だ。　わたしがそんなことを思っていたとき、

「きゃあああああ！」

高い、女の子の悲鳴が聞こえた。

続いて響く、爆発音。

「なにごと?」

反射的にバスケットをかばったわたしは、次の瞬間目を疑った。

ぬるり。

お屋敷の、向かって左側の壁から、女の子の頭が生えてきていた。

4・ファーストコンタクト（中）

黒髪の、女の子だった。すだれのように垂れたまっすぐな髪の間から、見えた頬は病的なまでに白い。

見ているうちに、女の子の頭は完全に壁から抜けだし、続いて上半身が、それから下半身が現れた。

生首ではなかったわけだ、とわたしが吐息を漏らしたと同時に、つまさきが完全に壁から離れ、女の子がするりと浮きあがる。

そう、「浮きあが」った。

壁から生えてきた時点であんな女の子でないことはわかっていて、これはもしか、

「幽霊……？」

枝垂れ柳の木の下に、今女の子は浮いている。「女の子」というよりも、「童女」といったほうがしっくりくるかもしれない。

黒髪を肩の上で切りそろえた彼女は、鮮やかな着物を身にまとっていた。その出で立ちは、日本のわたしの家にあつた、雛人形を思いださせる。

こちらの世界で暮らして七年目になるけれど、その間わたしはひとりととして、こんな和の格好をした人に出会ったことはなかった。その事実がさらに、童女を異質なものに見せる。

そして、わたしは目の前のお屋敷にまつわる、ひとつの噂を思いだしていた。

つまり、「幼い女の子が、屋敷の中に引きずりこまれていった」、という噂を。

その女の子の怨念が化けて出たんじゃなかろうかと、なかば本気でわたしが考えたとき、

童女がちらりとこちらを見て、 目が、合った。

「え……」

わたしは息をのむ。

童女は、金色の目をしていた。瞳孔は黒く、縦に裂けるように細長く伸びている。蛇の目に、よく似ていた。

血色を失い、青白いまでの肌に、唇だけはぷつくりと紅くつやめいている。その顔立ちとは人形のように、つまり自然ではありえないだろうと思うほどに整っていた。……が、整いすぎていて逆に恐ろしいと、わたしは感じた。

まとう異質な雰囲気と、人形じみた容姿のせいで、年の頃はわからない。ただ、背格好から判断するなら、まだ十歳前後の童女だった。

そんなことを考えている間にも、ずっと、わたしと童女の目は合っていたのだが、やがて童女のほうがふいと、興味をなくしたように、視線をそらした。

そして次の瞬間、すうつと、空気に溶けるように消えていった。

「な……」

なんだったの、と、言おうとしたわたしの声は、

「なんで、なんでなんで毒蛇地帯も死人防衛線も抜けて、もう嫌だ
あああ！」

再び屋敷のほうから上がった、半泣きの声に遮られた。

にわかに、今の今まで死んだように静まりかえっていた、屋敷の
中のほうがざわつきはじめる。

「主さま、どうか落ちつかれて」

「だれか、温かな飲み物でもご用意しろ！」

「もう行っちゃいましたよ、俺が確かめてきましょう」

そんな声と一緒に、お屋敷の、まわりの外壁とまったく同じ材質
の、玄関扉ががちゃりと開いた。

それはもう、あっけなく。

そして出てきたのは、サーモンピンクの髪をした若い男だった。
今年で十九になるわたしと、おそらくは同年代。臍脂色のチユニ

ツクと、紺色で細身のズボンの上に白衣を着ている。目は空色で、左目にだけ、薄い金縁のモノクルをつけていた。

チュニツクとズボンの組み合わせは、こちらの男性の一般的な服装だ。それはいい。白衣は、こちらではあまりお目にかかるものではないが、それもまあいいでしょう。

しかし、サーモンピンクの髪というのは……ああ、南西の生まれなら可能か。

この世界は大きく五つの地域に分けられる。北方、東方、南方、西方、そして、中央。

そして、元教師の爺さまいわく、この世界では髪の色を見ればある程度生まれた地域の特定が可能らしい。黒系なら北方、青系なら東方、赤系なら南方、白系なら西方、黄系なら中央、というふうに。そう考えるならピンク色は、赤系と白系の交わる南西生まれ、と予想できるというわけだ。ちなみに、北方よりやや中央寄りにあるわたしの町には、黒に若干黄色を混ぜたような、茶系の髪色が多かったりする。

……それにしても印象の強い頭だ。正式な名前がわかるまで、便宜上鮭と呼ばせてもらおう。

その鮭は、扉を開けてこちらの姿を認めるや、ぶんぶん手招いてきた。

「なんだ帰ってたのかよナキ、早くこっち来い、主さまをなだめんの手伝え」

5・ファーストコンタクト（後）

「……またですか」

わたしのななめ前に立つナキが言う。わたしの位置からは見えな
いが、きつと心配そうに眉をひそめたのだらうと、声色でわかった。

「そうそう。主さまぁーごっつい門番が帰ってきたんでもう大
丈夫ですよー」

屋敷の中に向かってそう叫んでから、鮭頭はくりんと再びこっ
ちを振りかえった。

モノクル越しの左目がすがめられ、わたしを見る。

そして、次にその薄い唇がつむいだ声は、打って変わって硬質だ
った。

「で、なにその女」

鮭頭の、空色の目が探るように、ナキとわたしを交互に捉える。

「おまえの女、じゃあねえな。人間だし」

じろじろじろ。不躰な視線とはきつとこういうものだろう。
たしかにわたしは不審人物なのかもしれないが、一応仮にも頼ま
れてやって来た身だ、そこまで警戒されるいわれはない。

眉を寄せたわたしのななめ前、かけらも毒を含まない声で、ナキが答えた。

「料理人殿です」

「……あーあーあー、主さまの絶食対策につれてくるとかいったあの」

話は聞いていたらしい。鮭のまなざしから硬さは消えた。
が。

「こーんな小娘がねえ」

かわりそそがれた見下したような視線に、ゆらと、わたしの感情が揺れた。

……端的にいうなら、いらつときた。

「見たところアナタだって同じような歳だと思うけど」

言われっぱなしは癪なので、ささやかな反撃を試みる。

しかし、あくまでナキの立場を悪くしない程度のささやか加減だったせいか、鮭はまったく応えていない様子で肩をすくめた。

「主さまを食わせるにや役不足に見えるけどなって話だよ」

ああそうですか。

まごまごこちらへ視線を向けてきたナキへ、わたしは安心させ

るように小さく笑ってみせる。そこへ、

「玄関を開け放すな、ラミナ」

低い、やたら威厳のある声を通った。

鮭頭の背後、扉の奥の闇から浮かびでるようにして、白い髭の老人が現れた。

老人は頭のとっぺんには髪がなく、耳の上あたりから床へつくほどまでに白い髪が伸びていた。鼻の下から口元を隠して伸びる白い髭もまた足元まで伸びている。踏んづけてこけないのかな、などと失礼な考えがよぎったが、心の中のつぶやきなので勘弁してもらう。

ともあれ、老人はゆっくりとこちらへ歩み寄ってきていた。

しっかりとした足取りだ。右手に、先端が渦巻き貝のようになった、背丈より高い杖を持っているが、それを歩行の支えにしている様子はない。杖や、この屋敷の外壁と同じ、長い年月を経た老樹のような、焦茶色のローブを着ていた。

やがて扉から一步出たところで立ち止まった老人は、ナキを見て、それからわたしを見て、薄く目を見開く。

それから、ゆったりと灰色の目を細めた。

「ようこそおいでくださいました」

言いつつ、老人はちらと横目で鮭頭を睨めつける。

「お客人がいらしているのに、ご案内もさしあげないとは。使用人の教育が行き届いておらず、お恥ずかしいかぎりでございます。なにとぞご容赦くださいませ」

「いえ」

わたしはただ首を振った。見下されるのはたしかに嫌だが、いきなり平身低頭で来られるのも対応に困る。だってわたしはそんなごたいそうな人間ではない。

……ナキがどう説明しているかは知らないが。

なんとなく嫌な予感がしたわたしの前で、

「私はこのお屋敷の使用人頭を務めております、モアレムと申します」

老人が名乗った。

そして、その名乗りが合図だったかのように、老人のうしろから、人影がわらわらと現れた。七、八人はいるだろうか。全員、深緑のローブを着ている。

その深緑のローブ集団に、わたしはあっという間に取り囲まれた。

「貴女が珍妙な料理をふるまうという料理人殿ですか」

「こんなお若い娘さんだったとは」

「その籠に料理が入っているのですか？」

「おお、なにやらよい匂いが」

珍妙つてなんだ。

小娘でごめんなさい。

うん、そうですけど。

ありがとう？

頭の片隅で淡々と返しながら、わたしは内心顔を引きつらせていた。もしかしたら表にも出ていたかもしれない。

なにこの大歓迎。歓迎というか、むしろ逃がすまい、って感じで囲まれてるんですけど。

深緑ローブ集団の目はぎらぎらしている。少なくともわたしにはそう見えた。なにこれ怖い。

これならまださっきの鮭頭、もといラミナの反応のほうがよかった。分不相応の期待をされるのはプレッシャーがすごいし、期待に応えられなかったあとが怖い。

輪の外で、他人事のように肩をすくめているラミナが憎い。いや、実際他人事なんだろうけど。つまりこれはたんなるわたしの八つ当たりだけだ。同じく輪の外でおろおろしているナキは うん、罪

がないから許してあげよう。

そんなことを思っている間にも、さあさあこちらです、と背中を押されて、わたしは屋敷の中につれこまれていた。

四方八方を深緑ローブに包囲されたまま、照明のない、暗い廊下を進まされる。

背後で扉の閉まる音がした。とたん、周囲が完全な真っ暗闇になる。

なにも見えない。ただ、周囲の人の息づかいと、ローブの衣擦れの音だけが聞こえる。

ちよつと待つて、冗談抜きで怖いんですけど。

「あの　っ」

ナキは、とわたしが言いかけたとき、目の前で、扉の開く音がした。

開いた扉の向こうは、ぼんやりとした翠色の光に満たされていた。

木肌そのものな焦茶の壁の、四隅に鈍い金の燭台が引っかけられ、そこに、蛍の光にも似た、翠の炎が灯って揺れている。

やはり焦茶の、調理台らしき設備が部屋の真ん中にどんと置かれ、それを囲むように黒い鍋やら調理器具やら、包丁やらが乱雑に散らばっている。日本風にいうなら八畳ほどの、ここは厨房らしかった。

認めたくないけど。

だってこの、厨房かつこ飯かつこ閉じには、わたしの頭ほどもある、巨大な蛙がいたところ跳びはねているのだ。翠の灯りに照らされて、緑の背中がてらてらとつやめいている。

食用の巨大蛙が這いまわっているという噂は本当だったのかと青ざめたとき、

調理台の向こうで、なにかがごそりと動いた。

いわゆる台所害虫Gではない。音からしてそんなサイズではなさそうだったし、ありがたいことに、こちらの世界にやつらはいない。

なんだ、と目をこらしたわたしのうしろのほうで、

「こんなとこでなにしてんすか主さま」

ラミナの声がした。

……は？

ぬしさま？

ぎよろり。調理台の向こうから、覗く目玉が二つ。

「……げこ」

こんもりと。小山のような巨大蛙が、そこにいた。

6・ユリエス

「……なにこれ」

「主人です」

答えた、使用人頭だという老人、モアレムを、わたしは振りかえった。

「ここの主人って蛙なんですか」

「いえ、これはその」

「げこ」

「完っ壁に蛙じゃないですか」

「あ、まちがえた」

背後から、声が聞こえた。

わたしはとつさに、背後にいる唯一の生命体、巨大蛙へと向きなおる。

今聞こえたのは若い声だった。だけど鮭頭　ラミナのものではない。もっと淡々として中性的な、アルトとテノールのちょうど中間くらいの高さの声。

まさか、と見下ろしたわたしと、見上げてくる巨大蛙の翠の目が、ぱちり、と合った。

巨大蛙の、口が開く。そして、

「君、なに？」

まごうことなき、人語をつむいだ。

「……ですから、この方が我々の主人なのです」

啞然としたわたしのうしろで、モアレムがいうのが聞こえる。

「このお屋敷の主。ユリエスさまと申しあげます」

「……屋敷の主は、蛙の血を飲むのが好きな変人だって……だから屋敷の中には、食用に飼われてる巨大蛙が這いずり回ってるって……」

そついう噂だったのに、まさかその蛙のうち一体が本人だったとは。

というか、

「なんで喋るの、蛙なのに」

わたしが、なかばひとりごつのように漏らせば、巨大蛙はぎょろりとその目を動かして答えた。

「人間だから」

……いやいやいやいや。

「どう見ても蛙だけど」

大きすぎるけどさ。ヒキガエルを巨大化したらまさにこんな感じだろう。

ただまあ言われてみれば、エメラルドのような翠の目には、人間的な知性が宿っていそうに見えないこともない。

「この姿には深くて浅い理由があるんだよ」

「……なにそれ、魔女に魔法をかけられたとか？」

たしかそんなおとぎ話が、日本にはあったような。

「なにそれ」

……違うのか。

こちらの常識は今でもたまによくわからない。人間がそう簡単に蛙になれるものだったか？

これも、帰ったら爺さまに聞くことリストに追加して、わたしは別の質問をすることにした。

「ところで、さっきの悲鳴はなに？」

蛙がきょろりと目を動かした。

「なんのこと？」

「女の子みたいな甲高い悲鳴だよ。さっき聞こえた。主さま、どうか落ちつかれて、とかなだめられてたんだから、あなたが上げた悲鳴なんじゃないの？」

蛙がふい、と顔をそむけた。

「知らない」

……たしかにあればアルテノールよりもっと、ソプラノに近い、高い悲鳴だったけど。

しかし、ということは。

「女の子を幽閉したりしてないだろうね」

噂のひとつを思いだしてわたしが問えば、案の定、蛙はまたこう返してきた。

「なんのこと？」

わたしはひとつ溜息をついた。

いい、深入りはするまい。好奇心は猫を殺す。そもそもわたしが今日ここに来たのは、探偵ごっこをするためじゃない。

そうでしょう、と視線をやれば、モアレムが心得たようにうなずいた。できた使用人頭だ。

「ユリエスさま、お食事をなさってください」

足元まで届く白い髭のモアレムは、穏やかだけれど毅然とした調子で言った。

「こちらの、リツヤ殿が、めずらしい料理をお持ちくださいました」

7・正体

どうしてこうなった。

今。シチュー作成中のわたしの隣で、巨大蛙が、毒物生成中である。

なにが悲しくて、バティのお乳に野菜とお肉をたっぷり加えた栄養満点ピンクシチューを、ど紫の、ときおりなぜか火花が散っている、アイアムポイズンと全身で主張しているような液体のそばで作らにやなんのか。

どうしてこうなった、かは、わかっている。

お食事をなさってください、というモアレムの言葉を、この人語を操る巨大蛙　ユリエスが、やだ、とにべもなく斬りすてたからだ。

ユリエスはそれから、ぼってぼってと移動して、長細い舌を使ってお玉やらなんやらを器用に引き寄せると、なんと厨房の鍋を使って、現在も進行中の毒物生成を始めた。

この、毒生成　モアレムいわく「お薬作り」こそ、ユリエスが食事をおろそかにして没頭している趣味なのだそうだ。

そうして鍋からもくもくと不穏な煙を立てはじめた主の背中を溜息まじりに見つめたモアレムが、わたしにひとつのお願いをした。

ユリエスさまの隣で、なにかこう、めずらしくて、おいしそうな匂いのする料理を作っていただけませんか、と。

材料はこちらで用意いたします。すぐそばで作っているところを見れば、ユリエスさまも興味を持たれて、食べてみよう、とお思いになれるやもしれませぬ、と。

それで、……どれだけこの蛙に甘いんだと思いつつも、わたしはうなずいてしまったわけだ。

理由は単純に、無駄足になるのが嫌だったから、なんだけれど。今はちよつと、いやかなり、後悔している。

とりあえず目下の手段として、できるだけ右隣の蛙と鍋は見ないようにして、貸し与えられた自分の鍋だけを一心にかき混ぜていた。もしかしたらこの鍋でも過去に毒物生成していたかもしれないなんて、考えたら負けだ。

……だから、背後からひそかなどよめきが上がるまで、隣の紫スライムをかき混ぜる音が止んでいることに気づかなかった。

「ねえこれ、なに？」

なんのどよめき？ と考えるより早く、ユリエスのアルテノールが聞こえた。ただしさっきまでと違ってずいぶん高い位置　わた

しの耳の上あたりから。

なんで？ あの蛙は巨大だったけれど、縦の長さはわたしの胸あたりまでだったはず……とそこまで考えて、わたしの思考は一時停止する。

真珠のように白い手が 内側から光を放っているんじゃないかっていうくらい白い、ほっそりした手が、右隣から伸びて、わたしのお鍋を指していた。

……まぎれもない、人間の手が。

「……っはあ？」

あわてて身体ごと右隣へ向いて、わたしは絶句した。

……まぶしい。

それが第一印象だった。

全体的に色素が薄いのだろう、ごくごく淡い、金の髪。肩まで伸びて、寝起きのように、わりと好き勝手に跳ねている。それでもぼさぼさした感じがしないのは、髪の本一本が繊細な絹糸のように細いからか。

服装は、白い、日本でいうTシャツのようなだぼっとした長袖の上衣に、これまた日本でいうジーンズのような、薄黒で細身な下衣を合わせている。ひとつの飾り気もない簡素きわまる格好だ。派手さのかけらもない。

なのに、「彼」の輪郭から、白い光がにじみだしているような錯覚を覚えた。

錯覚のおもな原因は「彼」の髪と肌だ。光をつむいだのような髪と内側から光を発しているように白い、真珠のごとき肌のせい。つて、自分で言つて薄ら寒くなったが、事実なのだからしょうがない。

と、いうか。

「……だれ？」

ひとつの予感があったけれど、否定してほしくて聞いてみる。

「え、なにいまさら」

「いいから名乗って、今すぐ」

「ユリエス」

「……嘘」

振り向いたけれど、だれも否定してくれなかった。それどころか、モアレムがこくりとうなずいた。

……まじですか。

あのだんぐりごつごつしたヒキガエルのどこをどうしたら、このすらいすべらかな人間になるんだ。

人間、というか、人形、にも見える。たぶん男だろうけど女だといわれても違和感のない、中性的、というより無性的な顔。眠たげな目を覆う、金色の睫毛は癪なほど長い。少年、というには大人だけれど、青年、というには頼りない、浮世離れた空気。

ヒキガエルなんて連想もできない。さっきの、壁から生えてきた童女に勝るとも劣らない、冗談みたいな美人だ。

ただ、エメラルドのような翠玉の瞳とアルテノールの声だけは、蛙の姿のときと同じだった。

「人間だって言ったでしょ、おれ」

……言ってたねそういえば。

「なんで蛙に化けてるの、どうやって化けてるの」

「おれの質問が先。これ、なに？」

「え」

これってなに、と、真珠の手が指すほうを見て、ああ、とわたしはつぶやいた。

「シチュー」

「しちゅう」

なんだその片言。不覚ながらちょっとかわいいとか思ってしまった。

ちようどできあがったことだし、と、わたしはお玉にひとくすい
して掲げてみせる。

「食べてみる？」

8・餌付け

はむ。

効果音をつけるとするなら、そんな音。

頭の隅っこ、冷静な部分でそんなことを考えながら、わたしは固まっていた。

……シチューを食べてみるか？ とは聞いた、たしかに。

そして、シチューをすくったお玉を掲げてみせたのも事実だ。

だけどもさか、そのお玉に直接食いついてくるとは予想外だった。

このお玉もう鍋につっこめないでしょうがどうすんの、とか、お行儀ってもんを習わなかったの、とか、言いたいことはいろいろあるがひとまずおいて。

「……どう？」

ユリエスが食いついているお玉を掲げたまま、わたしは、今一番気になることを聞いてみる。

お玉に食いついたまま、ぱちり、とユリエスが瞬いた。

……正確にはぱさり、か。なんとも睫毛の長いこと。

「……食べたことない味」

相も変わらず淡々とした、けれど、今はほんの少しだけ驚きを滲ませたような声音で言って、ユリエスの口がお玉から離れる。それ

でようやくわたしも硬直から解け、お玉を掲げていた腕をおろすことができた。……なんか突っぱってるんだけど。

ところで。

「食べたことない味って、それは気に入ったの気に入らなかった」

たの、とわたしが続けるより早く、ユリエスの白い手が伸びてきて、わたしの手からお玉を攫っていった。

そして今さっき自分が食いついたそれを、躊躇なくまたシチュー鍋の中に沈める。

「あ、こら」

「好き」

シチューをたっぷりすくったお玉を口いっぱいに含んだ状態で、器用にもユリエスは言う。その言葉を聞いて思わずわたしは、咎めようとしていたのをやめてしまった。

基本わたしは、わたしの勝手気ままな創作料理を好きだと受け入れてくれる生き物には甘いのだ。

「……ありがとう」

でもね。

おお、主さまが。

ユリエスさまが食事をなさったぞ！

そんなふうになぜか後についている背後へ、わたしは振り返る。

「……モアレムさん、お皿はありますか？ できれば深めの」

せつかく気に入ったんならちゃんと食べておくれよ。お玉に食いつくのは「食事をなさった」とは言わない。わたしは認めない。

「 本当に、ありがとうございます」

はむはむはむはむ。

まったく表情を動かさないまま、ユリエスは木の匙で、同じく木の深皿にたつぷりよそったシチューをどんどん消化している。焦茶の木製らしい円卓にはほかに、緑色唐辛子の肉詰めや、海老みたいな味がする赤い木の実・コルンのパイ包みもどきなど、わたしが作ってここまで持ってきた料理が所狭しと並べられている。

そんな主を横目に見ながら、モアレムがわたしに深々と頭を下げた。

「いいえ。こちらこそ、わたしの料理が気に入ってもらえてよかったです」

「私も、しちゅうを一匙、ご持参いただいた料理を一口ずついただきましたが、いずれもこれまで食したことのない、美味なものでした。リツヤ殿はすばらしい料理人であられる」

「……そんなことはありません」

こうまで褒められると、なんだか後ろめたい。わたしの勝手気ままな創作料理には、たいがい元ネタがあるから。今回作ったシチュ―なんかもまさにそれだ。日本という遠い遠い場所にあるその元ネタを、この世界の人たちが知るはずもないし、知るすべもないけれど。

「ご謙遜を。 こちらは、お約束のお礼です。お納めください」

そんな言葉と一緒にモアレムから差し出された青い布袋は、大きさをこそわたしの拳ひとつ分ほどだったけれど、

「どうぞ、お確かめください」

言われて、そつと袋の口を縛っていた紐を解いたわたしは絶句した。

きらきらと、エメラルドのように輝くこれは、

「翠貨……！？」
すいか

この世界のお金は四種類ある。

白貨、はつか青貨、せいか紅貨、こうかそして翠貨だ。

大きさ、厚さは四種類ともだいたい同じ。日本の五百円玉を三枚重ねたくらい。

ただし価値はおおいに異なり、白貨五百枚と青貨一枚が同等、青貨十枚と紅貨一枚が同等、紅貨五枚と翠貨一枚が同等である。たぶ

ん白貨が、日本の一円と同じようなものだとなは見ている。

そこから単純にかけ算すると、翠貨は一枚で二万五千円の価値があるわけだ。その翠貨が、渡された布袋には十枚入っていた。

合計、二十五万円也。

「いくらなんでも多すぎです」

わたしが今回持参した料理の材料費は、せいぜい青貨六枚、三千円分ほどだ。出張費と合わせたって、ぼったくりもいいところだろう。

「いいえ、どうかお納めください」

返そうとしたわたしを押しとどめて、モアレムがいう。

「無理ですよ、翠貨一枚でも十分すぎるくらいです」

「欲のない方だ。しかし」

きらり、と、モアレムの目が光った気がした。

「危険料、ということ、納めてはいただけませんか」

8 ・ 餌付け（後書き）

じわじわとお気に入り登録が増えている。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4267w/>

正しいお鍋の使い方

2011年11月27日15時06分発行